

門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

第8回 旧成田町のオビシャ

新勝寺の門前には、およそ1.5キロ四方に7つの町があり、女性たちはそれぞれの町の子安さまを大切にお守りしてきた。2月18日はオビシャと呼ばれ、各町が1年に一度その子安さまをお祀りする日である。それぞれの町には子安観音の掛け軸やお厨子があって、毎年新勝寺の僧侶による法楽が行われるが、そのほかに、お籠と呼ばれるご神体を7つの町が順繰りに回しており、受け渡しの当番にあたる町は、あつらえたそろいの着物と帯に身を包み、工夫を凝らした料理や余興の踊りでお互いに接待し合い、7年に一度巡ってくるはれの日を祝う。

お籠の宿主は1年間気が抜けない。もし何かあったら、まずお籠を守らなくてはならないので、夜もずっと同じ部屋で過ごした人もいるという。昨年お籠を預かった上町の滝澤家では、毎日欠かさず朝一番の若水と塩と米を供えてお守りしてきた。町の人が果物やお菓子を供えてお参りしてくれることもあった。お籠が次の町に渡る前には縄を縛り直して化粧直しをする。お籠の中に何が入っているのか見てはいけな^いと言^い伝えられているが、7年たつて再び回ってきたとき、

お籠が大きくなったり、重くなったりしていて驚くこともあるそうだ。2月18日、僧侶の法楽を受けた後、お籠は1年を過ごした宿を出て、お世話になった人に抱きかかえられて儀式の会場に向かう。そこでは、お籠を渡す町と、引き受ける町から15人ずつの世話人が出て、昔ながらの歌の応酬を



平成26年2月18日。引き継ぎの儀式を終えて新しい宿に安置されたお籠。両隣の飾りはベンケイ



仲町一上町のオビシャでの歌の応酬。もてなす側の上町が下座に並ぶ(平成26年)

する。豪華なお膳、この日のために練習を重ねた余興の踊りが続き、やがて頃合いを見計らって千秋楽が歌われると、いよいよお籠が次の町に引き渡される。お籠が渡った町では同じ宴を設けて引き渡した町を接待する。ことしお籠は上町から幸町へ渡っていった。

仲町には昭和18年にお籠を受け入れたときの記録が残っている。ここではオビシャという呼び名はなく「子安様年番」と記されている。昭和20年代後半まで、お籠の受け渡しは1月18日に行われていた。この年、前日の1月17日夜に、仲町の^{ひまわり}大野屋では婦人連が集まって日待と呼ばれる宴が催された。当日はまず5人がお籠を迎えに行き、1時間遅れて、今や遅しと2人がさらに迎えに向かい出した。お籠を送り出す本町では、女性が全員居並んで仲町の使者を出迎えた。僧侶の法楽の後に一同でベンケイと呼ばれる飾り物を作り、5人には豪華なお膳を出してもてなし、あとの2人にはおわんを含めて4品の簡素なお膳でねぎらった。余興の踊りはないが、仲町の人々はおちそうの褒め歌を歌い、お籠を受けて町に戻ったあとは、その年の宿元の大野屋で、お籠を見送りに来た本町の5人に5円のお膳を、後からやってきたお供の2人には2円のお膳を出して返礼している。夜は町の女性24人が集まってまた宴を楽しんだ。質素な暮らしの戦争中、この行事はどれほど大きな楽しみだったのだろうか。

こうして、その時代を生きる人が、その時代のかたちで、町を愛して先祖の精神を受け継いできた。各地の町や村で行われてきた子安さまの行事が、時代の流れとともに縮小したり廃れていく中で、門前町では都市的な華やかさを加えながら、今なお重要な神事として大切に引き継がれている。これをどのよう

に未来へ引き渡すか、女性たちはいつも心を砕いている。

(久保田滋子)

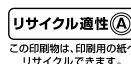
編集後記

11ページでお知らせした通り、広報課では昨年5月からフェイスブックで情報発信しています。開始当初の目標は毎日1回以上発信すること。これがなかなか難しく、取材のほかにも材料探しに四苦八苦。「いいね!」の数も思うようには伸びません。2014年サラリーマン川柳で6位入選したのは『「いいね」には「どうでもいいね」が約五割』の句でしたが、やはり反応は気になります。皆さん、清き「いいね!」をよろしく願います。

平成27年3月15日号 No.1287

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。